

書簡·川柳·詩歌





158627

吉川英治全集

補卷 3



編纂委員

川口松太郎

川端 康成

小泉 信三

小林 秀雄

佐佐木茂索

獅子 文六

講談社版

著作権者の了解
により校印廃止

吉川英治全集・補卷 3 書簡・川柳・詩歌

著者 吉川英治

装幀者 杉本健吉

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―一二二 郵便番号 一―二
電話 東京(〇三)九四五局 二―二一(大代表)
振替 東京三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大製株式会社
本文用紙 日本バルブ工業株式会社特澆

第一刷 昭和四十五年九月二十日

第六刷 昭和四十九年五月二十日

定価は箱に表示してあります

© 一九七〇年 吉川文字 (文2)

目次

書簡

一

川柳・俳句・詩歌

三

書

簡

大正十五年

1 六月十六日

発信地 杉並区馬橋

拝復 御芳書拝見いたしました 生活がと打ち明けての御話 ほかならぬこと またお互のことでもありません故 微力 できるだけのことはいたしたいとは思いました

御送付の「黄昏の街」は まだ今朝社から廻送されたばかりで拝読いたしている間がございませんので 内容に就て申し上げることはできませんが 御承知の通り 初一步の原稿は肝腎でそれが すらすらと行かないと何うもあととは難ですから

で編輯の方へは これは見せない方が好いだらうと思えます そして貴方も返事の方は御待ちかねでしょうから 原稿を拝見するのは後にして この返書を認めましたわけ 私の気もちを酌んで下されば幸甚です

御言葉には各地上演のもので 地方の目なじみがある故好かろうとありますが それは 反対な御考えて 雑誌の方では 未上演の新作を希望しています

どんな好評のもので 上演済み 殊に再三^{*}イタに かかったものは 使わぬようです 最近も 沢田^{*}がかかる約束の 額田^{*}氏の鳴神という喜劇なども 僅かな日を先の興行を延ばさせ 折角御送付になったもので

(註) 劇場の舞台上上演されたことをいう。

(註) 沢田正二郎。新国劇の創始者。故人。
(註) 額田六福。劇作家。

「黄昏の街」は 使わぬこと燎です で 不可ないと見越される原稿を出すのは貴方のため
得策ではありませんから 次に何か新作ものを 御書きになつてはどうかと思うのです その
時の用意に心づきの点も少々書いて置きましょう

◇枚数は三十二、三枚ごろ 貴方の原稿紙なら七十枚から八十枚どまり一編がどの雑誌でも使
い好い所です

◇読む脚本というところもち

◇掲載後の上演は作者の随意で 別に上演したいと社の方へ言ってくる向へは 作者の方へ紹
介してきます この点は極めて自由で親切なかわりに 概して喜劇脚本の稿料は頗るお安い
ようです

よく聞き糺しては見ませんが 五九郎^{*} 春秋座劇などの上演前の脚本 たいがい一月位らし
い それも なかなか厳選するのでどれでも持ち込めば買うというわけに行つて居りませ
ん 私が口添えいたしても 右様の次第で 原稿の内容その他ですらすら行くか行かないか 判
乎保証はできません
併し 前途多少の困難を見越してやってみる気もちがありましたら 如上の蕪言御含みの上
御再考願います

その上なら及ばずながら 何とか話をこぎつけて見ましよう

水府氏の御所一寸失念いたしています御会の節 よろしく

十六日

草々

吉川

※松島誠二郎様

玉稿後便にて御返送申上げます

(註)

曾我廼家五九郎。当
時の喜劇役者故人。

(註)

大正九年、三世市川
猿之助を中心に出來
た劇団。

(註)

岸本水府。関西在住
の川柳家。故人。

(註)

喜劇脚本家。

2 十一月一日

発信地 長野県下高井郡上林

冠省 先日御送付の原稿落手いたしました 御手紙と併せて原稿も拝読して 直ぐ東京の方へ送って見ようと思いましたが 目下は御承知の通り 新年号の繁忙季で そのメ切も過ぎた頃ですから そんな中に 新しい草稿を送りっ放しにするのは 不安に思われて手許に留めておきます で 私は十一月十日前後に帰宅する心意で居りますから 持ち帰って 特に貴方の事を 誰かに紹介しましょう

あの原稿が金にならないまでも 後 原稿の送れるような途を講じましょう
先日のものは 私として失礼ですが読む脚本として ややもの足らぬ心地がないでもないと思われませんが 兎に角 あれもどうにかなるように励めます 成りませんでも その時は悪しからず

兎に角 喜劇の脚本に 質の好いものが無いこと 東西とも 寥々の感があります
私の考えでは 前途ある仕事と思うのですが 目下の事情が不利なので 打ち込んでやる人がない様にも思われます

折角 貴方もどうぞ御自愛を祈ります

敬具

十一月一日

吉川

松島誠二郎様

いづれ 帰京の上 如上の 御返事申ます 大概十一月いっぱい

昭和元年

3 一月五日

発信地 不詳

諒闇の初春 御あいさつは致しません

旧臘は 誠に結構なものを御送附下さいます 有難う御座いました 本場のものとて 家人共が珍重がりました

暮から三日までの小暇を偷んで 伊豆の方へ出歩きましたので 着荷の御通知さえ申しおくれ 平に 御ゆるし願います

年首にのぞんで 意気のある御手紙は 嬉しく見ました 意気がなければいけません あまりに 自分で自分の量を計りすぎて 撞着しているのもよしあしです 今年はひとつ精かぎり 御筆硯を研がれるように望みます

まだ お目にかからず 自然深いお話をしたこともありませんが 貴方はあまり自己反省の常識になりすぎて居はしませんか 自分が持っているながら 自分で気づいていない力が出るまで ある時は 盲勇も まっしぐらな勉強も やってみることでございます 近ければと思うこともありますが 遠地なので残念です

先日 暮に面白の編輯者に逢いましたせつ あなたの名を申して あの後一度も送って来ま

(註)

面白倶楽部。

大正五年―昭和三年
まで講談社で刊行し
た娯楽雑誌。

昭和二年

せんね と言っていました

そのせつ 多少 私の狭い見解で 貴方の素質も 一言 言いそえて置きました もし書く
意気がありでしたら 同編輯の 中島民千君 浅野遊亀夫君へ宛て 私の名を申しそえて御
送稿になるよう 又 都合によっては 私の手元へ送ってきてもようございます

脚本とは限りません 何か自分の向く所 或は ヒントを得たままのもの

面白という雑誌は 新人の方にとっては 頗る面白味のある雑誌なのですから そんな話こ
そ 遠地ではできませんが 何しろ 大衆ものも 現在のままではありますまいが 推移はあ
りましようが 前途はなお 新しいいい人を要望するであろうと思います

折角御自愛を祈ります

一月五日

敬具

吉川

松島様

昭和二年

4 四月七日
つい御無沙汰になりました

発信地 修善寺新旅館内

(註) 面白倶楽部編集長。
(註) 同編集部員。

おかげ様で 胃腸は 自分でも有難いほどよくなりました わざわざ御送荷下さいました
鮮果 そんな状態なので 早速です 着いた日に 三ツ四ツ

あなたの胃袋はどうですか 帰京しましたら いちど 胃袋と胃袋の面接をやりましょう
前月 少年世界の方 枚数少なく恐縮です

小生 中旬頃 原稿の都合をみて 当地を去り 関西へ参ります それから先は家へかえる
か なお 旅でいるか未定です

家族も 一週間ほどきていますが 明後日は帰します で 水菓子は みんなの口へも入っ
たので 自然 一同からも宜しくというわけです

万語 帰京のせつ

四月七日

敬具

吉川

新井様*

(註)

新井弘城。少年世界
編集長。

5 四月二十二日

宝塚ホテルにて

先日 原稿料のことでお手数をかけ 早速御送りうけ すみませんでした

旅中 ついついいちいち入手の御通知もせず 失礼いたしました 十九日 修善寺を立ち 江
尻 久能山などを少し徒歩し 昨日 当地へ来ました

大阪へ着いた朝は 嵐で弱りました

次に 八天狗の 五百枝氏の挿絵は 非常に会心です 帰京の後は ぜひ一度お会い致しま

しょう

(註)

龍虎八天狗

(註)

齊藤五百枝。画家。

昭和三年

小生 四、五日 ここに落ちつき 京都をへて 来月初旬には 帰宅するつもりです
 おかげ様で元氣 とみに爽健をましてきました
 貴方も どうぞ 御自愛なさいますように
 大崎氏へも 宜しくお伝えおき願います

廿二日朝

敬具

吉川

(註)
少年世界編集者。

新井弘城様

6 月日不詳

発信地 杉並馬橋

今朝 寝起にお話を伺って びっくりしました すぐにお見舞したいと思いつつ それもな
 らず 案じ暮しています でも 御小康の御様子 ほんとしました 切に御加養を念じます
 原稿 廿六日朝までに 急遽 何とかいたします 実は 今朝より只今も少女の^{*} みはる^{*}
 氏 在宅なのですが 何とかいたします

(註)
少女倶楽部。

床臥の君へ御苦勞をかける傷ましさを おゆるし下さい
 寒気おいといを そして 一日もはやく御全快を祈ります

新井弘城兄

敬具

英治

7 三月十二日

発信地 杉並馬橋

過日は 東京名所図絵 誠にありがとうございました

これじゃあ あなたに揃えて貰ったようなものです 何しろもう少しでそろいます

骨を折って揃えたやつには やはり金で買った以外の愛撫がわきます

食いある記 順礼も 私がずぼらのせいかな 沙汰やみのていですが 尤も この頃は 私が

君のあとをひきうけて おカユです

少年世界四月号 だいぶ花々しく目先が変わって うれしく拝見しました

また いずれ そのうちに

十二日

吉川英治

新井弘城様

昭和五年

8 四月二十一日

発信地 杉並馬橋

拝ふく

四、五日来 風に悩まされます

*花火の文献に就て いろいろ御心にとめて下さる御様子 深く御礼申し上げます

先日 浅倉屋書房の目録で 珍書を発見 すぐ注文しましたが間に合いませんで 何とも残念に思っています

念に思っています

どうぞ 反古でも それに就てのものが御見当りでしたら 御知らせ願います

移転先は 前のごく近くです

御序の節は御立寄り下さいまし

廿日夜

英治

弘城兄 硯北

(註)
当時執筆の「銀河まつり」の資料

9 六月五日

発信地 杉並馬橋

毎々いろいろ御心くばり厚く御礼申し上げます

前に拝見させて戴きました合図画の方は 同様なもので 三木流火術図絵が御座いますので お戻し願いたいと存じますが 今日 御送附の 煙火薬法おゆずり願います お序のせつ 価格御知らせ下さいまし

勝手を申して恐れ入ります

お忙しいでしょう 私も唸っています いずれ一夕お遊びに御出まし下さい
そのせつ万語

敬具

吉川

新井様 硯北

昭和六年

10 一月九日

発信地 不詳

拜啓

折悪しく年末新春にかけて 例の御依頼の話 先方に懇通する機なく 今日漸く吉田氏と電話にて話し できる限り何とかするよう頼みました

就ては 読むに適する御作の脚本 御自選の上 二、三篇 至急 講談社内出版部主任 吉田和四郎宛て 御郵送願います 吉田君のことばでも 中、下巻ともすでに原稿そろい もし無理をするならば 他の作家のものを外さねばならず 又 ページ予算のくり合せなどもうごく事になる故 四圍の事情万やむを得ぬ折には 御返稿いたしても 失礼などと怒られぬよう あらかじめ その点だけは 御承知置き願いたいとのことです 然し能う限り 多少の無理はいたしても 一篇位は はいるように努めたいといっていますし 又 僕からももう一度口添えます故 とにかく御送りしてみてください

呉々も遅くなったことが遺憾です
東都 年初より 初雪 又雪 御健康を祈る
急ぎ 要用まで

八日朝

松島兄

英治

11 一月二十五日

発信地 芝公園

拝呈

稿労中 間筆おゆるしを

一昨日 吉田君来訪 過日 御依頼の件にて いろいろ御尽力の話あり 結果 既定一氏の作品を抜いても 又増ページの犠牲を払っても貴作編入すべしとのことに 安心いたしました 就て 昨日 部員藤田君 貴作中の「兄上京」一篇持参 それに決定のよし 然しながら